

南洋群島の互助慣行

—パラオとポンペイを中心に—

恩田 守雄

1. 序

本論文の目的は2018年8月パラオ諸島（パラオ共和国）、2019年3月ポンペイ島（ミクロネシア連邦）で行った村落の聞き取り調査から、相互扶助に関わる社会慣行を明らかにすることである（表1：「パラオの調査箇所」、表2：「ポンペイの調査箇所」参照）⁽¹⁾。始めに日本の田植えや稲刈り、屋根の葺き替えなどで主に労働力を交換する互

表1：パラオの調査箇所

調査年月	地 域	
2018年8月	農 村	・ Urdmau, Ngardmau ・ Ngetbong, Ngardmau
	漁 村	・ Melkeok, Melkeok ・ Malakal, Koror ・ Echang, Koror
	その他	・ Mokko, Koror ・ Koror, Koror

表2：ポンペイの調査箇所

調査年月	地 域	
2019年3月	農 村	・ Nankepin awak, U ・ Timwen, Madolenihmw ・ Wapar, Madolenihmw ・ Enipein pah, Kitti ・ Pwok, Kitti
	漁 村	・ Palipowe, Netti ・ Nammadar powe, U ・ Nanmwunsei, Sokehs (Sokehs Island) ・ Peidi, Sokehs (Sokehs Island)
	その他	・ Kolonia ・ Kitti Municipal government office

酬的行為のユイ、共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理などでヒト（労力）やモノ（物品）、カネ（金銭）を集約しその成果を分かち合う再分配的行為のモヤイ、冠婚葬祭で相手から見返りを期待しない支援（援助）的行為のテツダイについて（恩田，2006: 2019; Onda, 2013），それぞれ該当する南洋群島の互助行為を聞き取り（半構造化インタビュー）調査から取り上げる⁽²⁾。人口はパラオ共和国が21,729人（2017年，世界銀行），ミクロネシア連邦のうちポンペイ州は36,196人（2010年，国勢調査）である。島嶼国家のため互助慣行に関する統一的な行為と語彙を求めることが困難な点は東南アジアと同じであるが，本稿ではパラオとポンペイを対象に論じる。次にそれぞれの社会構造から見た互助慣行の特性を抽出し，調査対象地を中心に伝統的な互助慣行について日本との共通点と相違点を明らかにする。最後に両地域には日本人の入植もあったため，互助行為の日本からの影響という点で「互助慣行の移出入」について検討する^(*)。

2. パラオの互助慣行

(1) 代表的な互助行為

① 互酬的行為

ガラスマオ州ウルスマウ村の50代女性によれば，土地が広いわけではなくタロイモの収穫は自分一人ですので，労働力の交換による手助けはない（以下パラオ島では2018年8月の聞き取り）⁽³⁾。島内には外国人労働者が多く，特に女性はフィリピン人男性はバングラデシュ人が働いている。外国人を雇用するとパラオ人の仕事を奪うため，専門的な技能をもつ者だけを受け容れる政策が検討されている。

コロール州モッコ村の80代女性の話では，直接農業に関わる行為ではないが，青年たちが共同で家がない人のために家をつくることがあり，こうした手助けをパラオ語でクラインゲセウ（klaingeseu）と言う⁽⁴⁾。これは助け合いの意味で，この他見知らぬ人でも毛布やごごを提供し手助けすることがあった。同州エシヤング村（マラカル島）の60代男性によると，メンゲラクル（mengerakl）という労力交換は畑の草刈りなど女性だけの仕事で使う言葉である⁽⁵⁾。昔は船に10人から15人くらい乗りモリで刺して魚を獲っていたが，今はトロール船の5人で深いところの魚も獲る。獲った魚は島の皆で分け合い，日本の漁村で見られた「代分け」の慣行が見られる。

マルキョク州マルキョク村の70代女性によると，畑作は一人でしたが草刈りのときは手助けを受けることがある⁽⁶⁾。これは18年から20年くらい前までにあった組織で行い，10人から15人で一つの畑の草刈りをして，また別の人の畑を草刈りする労力交換があった。グループの人数はそのときの状況によって異なる。この労力交換を地元の言葉でメンゲラクル（mengerakl）と言った。農業だけをしている人はこのグループに参加するが，この女性は他に仕事をするようになってからこのメンゲラクルには参加しなくなっ

た。今はバングラデシュやフィリピン人を雇うことが多い。

②再分配的行為

<共同作業>

ガラスマオ州ウルスマウ村の50代女性によると、川や畑の水路の清掃はあるがこの作業は特に出なくても罰金のようなものはない。マルキョク州マルキョク村の70代女性の話では、道路の草刈りや海岸の清掃など共同作業に出られないときは1ケースの水(ペットボトル)を出す。この他食べ物の場合もある。海岸や海へのゴミの投棄は国の環境保護策で禁止されている。政府の奨励もありコミュニティの手助けが行われているが、高齢者は自分の家の前だけを掃除をし共同作業は免除されている。

コロール州エシャング村(マラカル島)の60代男性によれば、日本統治時代に使われたキンロウホウシ(勤労奉仕)という言葉で港のゴミを清掃する。村には男性が入るthaafasという組織があり、メンバーは高校生以上の35人いる。これはコロール出身者とソンソロール諸島出身者が入っている。女性の組織にはdinifaruyaがありメンバーは21人いる。男性女性ともにコミュニティ活動に従事し、様々な組織の手助けや出身のソンソロール島の清掃をすることもある。

<共有地>

ガラスマオ州ウルスマウ村の50代女性によると共有地はない。コロール州モッコの80代女性の話では、魚を獲ってそれを親戚に分ける慣行はオメカン(omekang)と言う。これは「食べさせる」「分ける」という意味がある。既述したようにこうした行為は日本の漁村にかつてあり、また現在も行われている「代分け」である。マルキョク州マルキョク村の70代女性によれば、共有地はないが親戚に土地や家を貸すことがあり事実上共有化している。

コロール州エシャング村(マラカル島)の60代男性の話では個人の土地しかない。ただしかつて使われていた共同家屋あるいは集会所としてアバイ(バイ, bai)が島の至る所に残っている。これらは島外から来た者の宿泊施設にもなったと言われている⁽⁷⁾。この点でパラオ島民にはホスピタリティ(歓待)の精神があるとされてきた。

<小口金融>

ガラスマオ州ウルスマウ村の50代女性によれば、余裕がないこともあるがムシン(muzing)はしない。このムシンは日本統治時代の無尽として伝えられた⁽⁸⁾。ムシンが日本語と知らない人があるほど、それだけ逆に日本語が地元の言葉として定着していることがわかる。コロール州モッコ村の80代女性の話では、ムシンは父や兄がしていた。兄は日本人と仕事をしていて、そのとき知ったようだという。親戚どうしていくら出すのか話し合いで決め、10ドルくらい出してムシンをした。自分はお金がなかったので、またそのやり方も知らないのではなかった。もともとパラオにはムシンがなかった

ことから、日本から入った仕組みであることがわかる⁽⁹⁾。同州ゲツボング村の20代男性によると、一般に地元の人にはムシンと言う。この男性の母と祖父がムシンをしていたが、それは毎月18人から19人くらいで一人50ドル出した。姉と自分の分を加えて母がしていたこともある。毎月くじ引きで2人の受け取りが決まり、18人なら9カ月で終わる。くじは箱の中の紙（札）を引くが、あたりの札には「おめでとう」、「お金持ちになったね。これからおごってね」という言葉が、またはずれの札には「残念だね。また今度ね」と書いてある。なお「おごる」は日本語だが、パラオ語の「オゴル」はパイナップルを意味する言葉で、このため「パイナップルしてね」と言うと、それは相手におごってもらうことを意味する。ムシンが当たりのとき、この言葉を札に書くこともあった。

マルキョク州マルキョク村の70代女性の話では、自分はムシンをしないが知り合いがしている。センプウキ（扇風機）やデンワ（電話）、エンソク（遠足）などの言葉がパラオ語だと思っていたのと同じように、このムシンという言葉も日本語だと知らなかったが今はわかっている。マラカル島で50年以上も住む80代の日本人女性によれば、ムシンを自分はしないがまわりの人はする。島は家族と同じで皆必要なときは助け合っている。コロール州エシャング村（マラカル島）の60代男性からは、ムシンという言葉は日本語だと知っていたが、自分はしないが家族はすることを聞いた。

③支援（援助）的行為

<葬儀>

ガラスマオ州ウルスマウ村の50代女性によると、葬式では代表者を選び食べ物をどうするかレストランから注文するかなど段取りを決める。後述するようにオメングカド（omengkad）と言い、故人の「謝金」の返済のためお金を出す人もいる。マルキョク州マルキョク村の70代女性の話では、この州には2つの女性グループがあり、一つはngara otellouchで成人から高齢前の女性で、もう一つは高齢女性でngara otilechと言う。これらは60人から70人くらいの組織で、主として葬式のときだけ活動する。この女性は高齢者のグループに入りたくないで、前者のグループに所属している。一般にタロイモやタピオカを作って喪主の家を持って行く。葬儀に限らず、貧しい人にはタロイモや魚などの食べ物をあげることがよくある。

同様に男性のグループも二つあり、一つはngara mecherocher（大人の男性）とngara tonguang（高齢者の男性）で同じ活動をする。いずれも日本統治時代の「青年団」という言葉がそのまま使われてきた。かつては日本の影響もあり州レベルの組織として入らなければならないものだったが、今はアメリカの影響が強く必ずしもこうした組織に入るわけではない。これは住民に対する直接統治の日本の集団主義、間接統治のアメリカの個人主義の違いを示していると言えよう。この他omadekという日本の葬式組に相等するグループがあり親戚が弔慰金を出す。これは借金の肩代わりをするオメングカ

ド (omengkad) とは異なる。

コロール州エシャング村 (マラカル島) の60代男性によれば、見知らぬ人でも毛布やごぞを提供し手助けすることがこれまでであった⁽¹⁰⁾。このように各世帯の生活水準に応じて地域社会で不幸を分かち合うが、特に故人の負債返済の慣行は新しい旅立ちを見送る慣行として注目したい。

<婚儀>

コロール州モッコ村の80代女性の話では、祝儀では二つのやり方がある。一つは女性の家族が食べ物を提供し (ngader)、男性の親戚が女性の家族に対してお金を出す (bus)。もう一つは結婚式をせずに子供が生まれたときに祝い金や食べ物を提供する (buuldiil)。パラオでは結婚したときに結婚式をせずに、子供が生まれてから改めて子供誕生式を結婚式の代わりにすることが少なくない。

ガラスマオ州ウルスマウ村の50代女性によると、パラオでは普通の式は女性の家族が食べ物を、男性の家族が祝い金を出す。子供ができてから式をあげる場合もあり、これは先に述べた子供誕生式でオメングト (omengat) と言う。この式をするかどうかは男性の家族が決める。家族以外では魚やフルーツ、タロイモ、米などを出してお祝いをする。マルキョク州マルキョク村の70代女性の話では、今は教会やホテルで式をあげる。親戚なら食べ物を持って行くが、最近はお金を封筒に入れて持参する。先にあげた女性グループと男性グループは葬儀のときだけ手助けをし婚儀では関与しない。

コロール州エシャング村 (マラカル島) の60代男性によれば、男性の家族が食べ物をつくり手助けする。このときお金を出して「私の子供 (息子) とあなたの子供 (娘) を結婚させてください」と言い、「はい」と返答があると式をあげる。それぞれの家庭環境に応じて地域社会で喜びを分かち合うが、子供の誕生式を結婚式として祝う慣行は婚儀に費用をかけたくない面と実質子供が生まれることで新しい家族の誕生を世間に披露する意味があると言えるだろう。

(2) 地域社会のつながりと絆—故人の借金返済

コロール州モッコ村の80代女性によると、パラオにはもともと葬儀のとき死者の借金を軽減するなどお互いに助け合うオメングカド (omengkad) の慣行があった。主に親戚が借金の返済を肩代わりする。集めたお金で死者の借金を払い終わり、残りをたとえば奥さんが1万から2万ドル、子供が千ドル受け取り、また女性の親戚が受け取ることがある。同州エシャング村 (マラカル島) の60代男性の話では、同様に式場をきれいにしお金を出して借金を返済するオメングカドがある。このように相互扶助が行き届き地域社会のつながりや絆は強いように思われる。

ガラスマオ州ゲツボンク村の20代男性によれば、亡くなった人の借金を親戚や地域住民がお金を集めて返済する慣行は正式には omengkad el blals と言う。omengkad は「払

う、支払い」、elは「の」、blalsは「借金」の意味がある。こうした慣行は南洋庁の『南洋群島に於ける舊俗慣習』には記載がない（南洋廳、1939）。おそらく戦前からの土着の慣行と思われるが、死者に対する弔意の表れと言える。この男性の母親のお兄さんが亡くなったとき銀行やお店の借金が約2万ドルあったが、これを約300人が出して5万ドル集めた。

親戚はつながりが濃いため多く出すが、パラオでは特に女性がお金をもっているとされその分金額も大きくなる。一般に世話人の男性がいて、集めたお金を代表として葬式で出す。この例ではおばさん（死者の妻）が5千ドル、母親が2千ドル、男性のお姉さんが500ドル、この20代の男性が50ドル出した。このように故人の借金を近親者や住民が分担して返済する仕組みはカロリン諸島ではそう多くはない。こうした行為は「この世」に悔恨の思いを残すことなく「あの世」に旅立つ死者への地域社会の温かい思いやりと言えらる。そこには間違いなく家族のみならず地域住民の緊密なつながりがあり、強い絆による相互扶助が示されている。

表3：パラオの互助慣行

行為の種類		日本	パラオ
互助行為		相互扶助	・ クラインゲセウ (klaingeseu) ・ ンゲセウ (ngeseu)「助け」、オルゲセウ (olngeseu)「助ける」
互酬的行為		ユイ	・ メンゲラクル (mengerakl) 農作業（畑作）の労力交換
再分配行為	共同作業	モヤイ	村仕事 代分け ・ キンロウホウシ（勤労奉仕） 若者組（青年団）の活動 ・ オメカング (omekang) 魚などを親戚に分ける慣行
	小口金融	頼母子無尽	・ ムシン (muzing) 住民のインフォーマルな金融互助
支援（援助）的行為		テツダイ	葬儀 ・ オメングカド (omengkad) 死者の借金返済 (omengkad el blals, omengkadは「払う、支払い」、elは「の」、blalsは「借金」の意味)。 ・ オマデク (omadek) 弔慰金の提供、式場の清掃などの手助けをする葬式組 婚儀 ・ 女性の家族が食べ物を提供し (ngader)、男性の家族が祝い金を出す (bus)。 ・ 結婚式をせずに子供が生まれたときの祝い（子供誕生式, omengat）で祝い金や食べ物を提供する (buuldii)。

3. ポンペイの互助慣行

(1) 代表的な互助行為

① 互酬的行為

ネッチ地区パリポウエ村の70代男性によると、家を建てる時シュワスペネ (sawaspene, sawaはhelp, peneはeach ohterの意味) という言葉を使う⁽¹¹⁾(以下ポンペイでは2019年3月の聞き取り)。これは義務を伴わない相互扶助の行為で、厳密には日本の互酬的行為のユイに相当する言葉とは言えないが、互いに手助けし合う労働力の交換行為でも言われてきた。こうした手助けの作業では伝統的な飲み物(シャカオ, sakau)を出すことが多い⁽¹²⁾。また日本語の組合に由来するクミアイ (kumiai) という言葉で、今日はAさんの仕事、明日はBさんというように順番にまわす労力交換があり、これはかつて日本で行われた田植えを集団単位で順番にするユイ組の行為に近似する。このクミアイは集まりのときも使われるが、現地語では人の集合をミニミン (minimin) と言う。

ウ地区ナンマドールポウエ村ナンマダルの60代女性の話では、シュワスペネという言葉で手助けする⁽¹³⁾。現在自分の兄弟は既に結婚しているため一人で母親の面倒をみている。この行為をシュワスペネと言う。同地区ナンケピニアワク村ナナワクの80代男性によると、自分で何かをするとき親戚や友達が来て手助けしてくれるのは当たり前のように行われてきた。シュワスペネは葬式や誕生日などでも使う言葉である。マトレニーム地区チョモン村の60代男性によれば、家を直すとき隣近所で手助けするが、この行為をシュワスペネと言う⁽¹⁴⁾。これは何らかの仕事をするときにも使う。同地区ワパール村の70代男性の話では、各家ごとに問題があれば家族同然手助けする⁽¹⁵⁾。生活水準の違いもあるが、車がない人には車を出して運び、これもシュワスペネで行う。

キチ地区エニペインパー村の60代女性によると、農作業の手助けをし草刈りでも協力するが、これらの行為はシュワスペネである⁽¹⁶⁾。同地区ポーク村の90代女性の話では、お祝いのカマデップ (kamadipw) のときシュワスペネという言葉を使い、また隣近所で手助けするときもこの言葉を言う⁽¹⁷⁾。ポンペイ島の北西にあるソケース島ペイディ村の50代男性によれば、シュワスペネに相当するチューク語にアニニシフェンゲン (aninisfengen) という言葉がある⁽¹⁸⁾。この言葉は協力し合う意味をもち、伝統的な食べ物やパン(麵麩)の実を潰してケーキなどつくる時の手助けにも使う。

② 再分配的行為

<共同作業>

ネッチ地区パリポウエ村の70代男性によると、毎週土曜日担当者が声をかけて皆で道路を清掃する。日本のような出なくても過怠金のようなものはない。ウ地区ナンマドールポウエ村ナンマダルの60代女性の話では、家をつくる時手助けをし地区では決まっ

た場所を掃除する。必ずしも男性一人というわけではなく出られる人が出る。また海岸のゴミは個人の土地でそれぞれ対応している。同地区ナンケピンアワク村ナナワクの80代男性によれば、屋根の葺き替えは共同で作業した。これもシュワスペネと言った。

マトレニーム地区チョモン村の60代男性の話では、草刈りや家をつくるとき出られる人が労働力を提供する。同地区ワパール村の50代女性によれば、プロテスタントの仲間が集まり料理をつくることがある。キチ地区エニペインパー村の60代女性から、クミアイとして山に入り土地を開墾して木を伐採することを聞いた。ポンベイの一般的な共同作業では「クミアイの仕事をしましょう」、「何の仕事をするのですか」、「草刈りの仕事をします」、「バナナを植えます」などと言うことが多い。共同作業は現地語でプウィン(pwhin)とも言う。1年に1回作物の豊作としてナーンマルキ(最高首長、酋長)に持って行くが、このお祝いが先に述べたカマデップと言われる。キチ地区ポーク村の90代女性によれば、山に入り草刈りをするが、出られる人が出ればよく出ないといって非難されることはない。ソケース島ナンモウセイ村の60代女性によると、月1回海岸の清掃がある⁽¹⁹⁾。出なくても日本のように過怠金を払うことはない。ソケース地区ベイディ村の50代男性の話では、草刈りなどの共同作業はクミアイの仕事としてする。

<共有地>

ネッチ地区パリポウエ村の70代男性によれば共有地はない、すべて個人の土地だが、許可を受ければ他人の土地も利用できる。誰も所有していないあるいは受け継ぐ人がいない土地があれば、土地利用の申請をすると所有者になれる。こうした土地の多くは交通の不便な利用しづらいところにある⁽²⁰⁾。

ウ地区ナンマドールポウエ村ナンマダルの60代女性の話では、自分の周辺には共有地はない。しかし日本人で地元の女性と結婚した人がよくカツオの頭をくれるので、それを病気見舞いで他の人に持っていくことがあり、地域の支え合いはそれなりにできている。同地区ナンケピンアワク村ナナワクの80代男性によると、土地を多くもつ人が土地のない親戚に与えることがあった。自分が若い頃はお金を必要とすることがなく、食べ物の不自由さもなかった。自給自足のため日本の貧しさとは基準が違うため、必ずしも当時貧しかったとは言えない。地元の飲み物のシャカオは人にあげることが当たり前で、魚も配ることがあった。人に物をあげるときキサキス(kisakis)と言う。自分一人多く持っても魚が腐るので配ったが、今は冷蔵庫で保管できるので配ることも少なくなった。日本の「代分け」のような直接漁に出なかった人にも魚を配る慣行があったことがわかる。

マトレニーム地区チョモン村の60代男性の話では、マングローブのような土地は個人の土地ではない。このため皆の許可を得て、家を建て土地を利用することは可能である。ただし個人の土地を通してそのマングローブに行くときは許可を必要とする。同地区ワパール村の70代男性によれば、土地は個人のもので共有地はない。自分の家では魚を獲らないが漁師からもらうことがあり、これは既述したキサキスの慣行である。

＜小口金融＞

ネッチ地区パリボウエ村の70代男性の話では、地域の住民は小口金融をムシン(mwusing)と呼ぶ。その仕組みは女性が毎週日曜日に20人集まり一人20ドル出して月5回するが、利息はつかない。1から20番の番号札を用意してクジを引き、受け取る順番は一度に決まる。欠席すると20ドルに加えてさらに20ドル払う。この仕組みはもともとポンペイにはないもので、日本統治時代に入ってきた無尽の互助慣行と言える。このときビンゴゲームをする。当選の品物によって金額は異なるが、一つのビンゴゲーム(カード)につき1ドル出してゲームに参加する。ムシンの受取人が男性用にはココナッツ、米など、女性用には服などの景品を7つ用意してゲームの準備をする。このビンゴゲームはムシンの参加者とは別に一般の人も1ドル払えば参加できる。

ウ地区ナンマドールボウエ村ナンマダルの60代女性によれば、お金があるわけではないので自分はムシンをしない。その分キリスト教徒の集まりがあり、病気の人にパンの実を多くつくり提供して支え合っている。同地区ナンケピンアワク村ナナワクの80代男性の話では、この地域では銀行でお金を借りることは少なく一人20ドルくらい出してムシンを10人から50人で行い、月あるいは週1回集まる。受け取りの順番は集まったときにその都度決める。自分はしなかったがまわりの人がよくしていた。仲間の信頼関係が基本にあるのはどこも同じである、なおこの男性はムシンが日本語の無尽から来ていることは知っていた。

マトレニーム地区チョモン村の60代男性はムシンをしないが、奥さんが家計を助けるためする。半月に1回集まり10人以上で行い、一人100ドル出すが多い人は150ドル出すことがある。このためムシンで中古の車を買う人もいる。受け取りの順番は最初のクジで一度に決める。利息はつかずに、最初に受け取る人も後の人も金額は同じである。この男性はムシンが日本語からきていることを知らなかった。同地区ワパール村の50代女性によると、ムシンは半月あるいは1ヶ月に1回土曜か日曜の午後にする。平日なら夜する。場所は個人の家でもするが人が集まる公会堂です。この集まりをミニミンと言う。仕組みは20人くらいで一人20ドル出すが100ドル出すこともある。利息なしで受け取る順番は1回で決める。一つのムシンだけでなく複数のムシンに参加する人もいる。ムシンをする理由は病気をしたときや車がほしいときの資金調達である。男性は生きていさえすればよいという人が多いのに対して、女性がムシンを多くするのは家に何が不足しているのか必要な食べ物をよく知っていることにもよる。男性もするが奥さんにお金を渡すことが多い。こここのムシンもビンゴゲームを伴う。このビンゴにはムシンに参加しない人も一つの札1ドルで参加できる。この話を聞いた女性はムシンが日本語だとは知らなかった。

キチ地区エニペインパー村の60代女性の話では、ムシンは月に2回半月に1回する。一人100ドル出して20人くらいです。受け取りはすべて最初に決める。ここでもビン

ゴゲームをする。この女性が身につけているスカートもビンゴで当てたものと言う。ビンゴでは50人から100人くらい集まる。その参加料は50セント、1ドル、2ドルといくつかある。ビンゴの商品にはパソコンもあるが、その場合は参加料も高くなる。ムシンで受け取る人がビンゴの賞品を決めて用意するが、この参加料はその人に入る。同地区ポーク村の90代女性は高齢ということもあり、ムシンという言葉自体わからなかった。同じくポーク地区の40代村職員によれば、自分もするがお互い助け合うためにするのはいいことだという意見を聞いた⁽²¹⁾。信頼関係にある友達18人が毎週水曜日に集まり、一人10ドルとブタの餌をもって来る。くじ引きで受け取る順番がすべて決まる。村にはムシンのグループが50ほどある。自分たちのグループではビンゴはしないが、ビンゴの賞品にはスカートやお金もある。多くのムシンでビンゴゲームをするが、これを「ビンゴつきムシン」と言う。コロニアに住む40代男性になぜムシンをするのか質問したところ、多くの人の参加による出資でより多くのお金を集められるからで、その分ビンゴの賞品を用意しなければならない手間はあるが、参加メンバーとの親睦もそれだけ深まる。

ソケース島ナンモウセイ村の60代女性の話では、ムシンはしないがビンゴゲームに参加する。出身のピングラップ島ではもともとムシンをしなかった。ビンゴは一人1ドル出す。賞品は洋服や米、フルーツ、お金もある。地区の人が集まり声をかける人がビンゴの準備をする。その人も参加できる。ソケース地区ベイディ村の50代男性はムシンがポンペイの言葉で日本語とは知らなかった。チューク（トラック）諸島ではこうした金融互助をモーラン（mouran）と言う。自分も島で仕事をしているときモーランをした。月2回給料から一人50ドル出し会社の8人で行った。受け取りの順番は最初にくじで決める。自分が参加したムシンではビンゴをしないが、「ビンゴつきムシン」ではムシンの仲間がビンゴの準備をして、ビンゴの参加料はムシンの受取人がもらう。

<若者組>

かつての日本同様若者組が存在し、地域の共同作業などで一定の役割を果たしている。ネッチ地区パリポウエ村の70代男性によると、ユースという若者の組織はだいたい男女14歳から20歳くらいまでの者が参加する。ウ地区ナンマドールポウエ村ナンマダルの60代女性の話では、18歳以上から年配の人まで参加する女性グループがあるが、自分は母親の面倒があるので参加していない。この他毎年「女性の日」（2019年は3月8日）があり様々なイベントが行われている。

③支援（援助）的行為

<葬儀>

ネッチ地区パリポウエ村の70代男性の話では、葬式は各自の経済事情に応じて米やパン、豚、伝統的な飲み物のシャカオを出す。土葬では墓地がなく自分の土地に埋めるが、家の中に埋める人もいる⁽²²⁾。この埋葬のとき多くの人が集まり手助けする。2日目に

は家族、親戚の人が集まり、3日目には魚を持ち寄り伝統的な飲み物のシャカオを出す。4日目には皆で掃除をしてシャカオで慰労する。10日目には家族と親戚が集まり、さらに40日目1年目という節目の年に供養する。ウ地区ナンマドールポウエ村ナンマダルの60代女性によると、葬式のときできる範囲でいろいろなものを持ち寄るが女性は食べ物を持参し、なかには石焼きの豚やシャカオを持ってくる。お金を出す人もいるが、パラオのような死者の借金を返済することはない。同地区ナンケピンアワク村ナナワクの80代男性の話では、昔はパンの実や石焼きのヤムイモ、シャカオ、この他犬や豚を持ってくることがあった。今は米を出すことが多い。葬式組のような組織はない。

マトレニーム地区チョモン村の60代男性によれば、米やパン、砂糖、コーヒー、ヤムイモ、パンの実、豚、シャカオなどを持ち寄る。葬式のときナーンマルキ（最高首長、酋長）に来てもらうと名誉となる。墓穴を掘るときも同様である。お金は入れ物（ボール）を用意してその中に25セントから自分の生活力に応じた額を入れる。借金があっても亡くなるとそれで終わる。従ってパラオのような亡くなった人の借金を家族や親戚、近隣住民が負担することはない。同地区ワパール村の70代男性からは、ヤムイモやシャカオ、豚を持ち寄り土葬で行うことを聞いた。キチ地区エニペインパー村の60代女性の話では、葬式は教会に集まってするが持参する食べ物などは個人の家に持って行く⁽²³⁾。

ソケース島ナンモウセイ村の60代女性によると、葬儀や地域活動があるときお互い協力することをシュワスペネと言う。豚肉や魚、米、パンを持参するが、シャカオは出さない。これはボンベイ住民とは異なるピングラップ島出身移住者の生活様式の違いでもある。ソケース地区ペイディ村の50代男性の話では、夜皆集まり米やコーヒー、砂糖、パン、ドーナッツを出し、翌日墓穴を掘るときはシャカオや豚を持参する。コロニアに住む40代男性によれば、通夜の翌日に墓穴掘りがあり3日目皆が喪家に集まり慰労する。このように各世帯の生活水準に応じて地域社会で悲しみの共有がされている。

<婚儀>

ネッチ地区パリポウエ村の70代男性によると、教会で式をあげその後家や地域社会で祝う。お金のある人は二次会をレストランでする。文化が違うため国際結婚は少ない。ウ地区ナンマドールポウエ村ナンマダルの60代女性の話では、結婚式では昔は大きなテーブルを出して料理をしたり食べ物を持ち寄ったが、今は教会で式をあげてサンドイッチなどの料理を来訪者に提供しシャカオを振る舞う。ウ地区ナンケピンアワク村ナナワクの80代男性によれば、教会で式をあげ家族で集まりシャカオで祝う。二次会はパーティ形式でする。

マトレニーム地区チョモン村の60代男性からは、新郎新婦と握手するときにお金を渡すことを聞いた。同地区ワパール村の50代女性の話では、結婚式ではシャカオを出してもてなすが、葬儀同様様々なモノを持参する。一般に女性が男性の家に住むことが多い。キチ地区エニペインパー村の60代女性によれば、教会で式をあげて各家で祝うが、家に牧師が来て式をあげることもある。ナーンマルキの位階に応じて品物を持参する。

ソケース島ナンモウセイ村の60代女性からは、結婚式では豚やヤムイモを持ち寄りが、昔は始めに豚の手だけ持って行き花嫁の家族がそれでいいとなると豚全体を後から持参したことを聞いた。今はパンを持って行くことが多い。葬儀同様ピングラップ島出身者の結婚式ではシャカイオを出さない。ソケース地区ペイディ村の50代男性によると、教会で式をあげ米や食べ物を持ち寄りシャカオで祝う。各島で食べ物の違いはあるが、自分たちチューク（トラック）諸島のコミュニティ以外に食べ物を持ち出したいくないという感情もある。これは独自の食文化を守りたいという気落ちと食べ物の減少を控えたいという複雑な感情を吐露しているように思われる。子供たちは同じ郷里の出身者で結婚する者もいれば、ポンベイ人と結婚する者もいる。それぞれの家庭環境に応じて地域社会で喜びを分かち合っていることがわかる。

（2）地域社会のつながりと絆―「ビンゴつきムシン」

ポンベイのムシンはその出資者だけではなく、地域住民も何らかの恩恵を受けられる仕組みをもっている。ムシンの受取人がビンゴの景品を用意する「ビンゴつきのムシン」は、受け取った人が自らの私益を共益に代える役割を担っていることがわかる。すなわち自分だけお金を得るのではなく地域住民にもその恩恵を与えるところにささやかな連帯と共生に基づく互助社会のつながりや絆を見ることができると言える。ムシンは日本からの互助慣行の移入として捉えられるが、ビンゴを伴う点は外来の慣行をポンベイ独自の慣行として同化融合した仕組みと言えよう。人数は20人くらいが一般的で、金額も20ドルが平均的な額だが、なかには100ドル出す場合もある。また利息なしで受け取りの順番が一度に決まる点は入札で決まることが少なくない日本の頼母子（無尽）また韓国や中国、台湾の利殖志向の小口金融とも異なる（恩田，2019）。

コロニアに住む40代男性によれば、ムシンはくじ引きが原則だが、子供がアメリカに留学する、フィリピンの大きな病院に入院するなど、一度に多額のお金を必要とするときは受け取りの順番を先にすることがある。銀行でお金を借りると利息を払わなければならないがムシンはその必要がない。この点銀行はムシンが盛んになると困ることになる。経済的理由の他に親しい人どうしの親睦も目的としてある。女性が主にするが、シャカオや食べ物で女性はわいわい騒ぐのが好きなためとされる。「ビンゴつきのムシン」ではムシンで受け取る人がビンゴの賞品を決め用意するが、この参加料がその人に入るのも大きな特徴として指摘できる。ビンゴの景品は廉価なもので参加料は1ドルだが、パソコンのような高額な賞品ではそれだけ参加料は高くなる。

このように特定少数のムシンに対して、同時に開催するビンゴゲームは不特定多数の地域住民の娯楽の要素が強く、ムシンの受取人がビンゴゲームを用意することが重要でそれは受取人の義務とされる。ムシンのメンバー以外にもわずかな額を払うことで参加の門戸を開く「ビンゴつきムシン」は住民参加型の娯楽と言えよう。

表4：ボンペイの互助慣行

行為の類型		日本	ボンペイ
互助行為		相互扶助	<ul style="list-style-type: none"> ・ シュワスペネ (sawaspene, sawaはhelp, peneはeach ohterの意味) 義務を伴わない行為 ・ アニニシフェンゲン (aninifengen) チューク (トラック) 諸島からの移住者で言う協力し合う行為
互酬的行為		ユイ	<ul style="list-style-type: none"> ・ クミアイ (kumiai, 組合) 二者関係義務を伴う行為 農作業 (畑作) の労力交換
再分配的行為	共同作業	モヤイ	<ul style="list-style-type: none"> ・ クミアイ (kumiai) 複数 (集団) の義務を伴う行為 現地語ではプウィン (pwhin) ・ キサクシ (kisakis) モノを分け合う行為
	小口金融		<ul style="list-style-type: none"> ・ ムシン (mwusing) 日本の無尽からの転用 住民のインフォーマルな金融互助
支援 (援助) 的行為		テツダイ	<ul style="list-style-type: none"> ・ シュワス (sawas) 自然な感情としてする行為 牧師の言葉 ・ ナーンマルキのタイトル (称号) に応じて品物を出す。上位者は伝統的な酒 (シャカオ) や豚を持参する。
			<ul style="list-style-type: none"> ・ シュワス (sawas) 牧師の言葉 ・ ナーンマルキ (位階制度) のタイトルに応じて品物を出す。 ・ カマデッ (kamadipw) で喜びを分かち合う。

4. 日本と南洋群島の関係

(1) シマ社会の集団主義と個人主義

①パラオの島民性

パラオ社会は母系制社会とされる。パラオ博物館の展示資料によると、部族の最高首長 (酋長) は男性だが選ぶのは女性で女性の意思決定権が強い。女性が青の通貨 (伝統的な通貨udoud) のペンダントを身につけていれば地元のパラオ人とわかると言われていたのはそれだけ女性が資金管理をしてきた伝統を重んじるからで、またフィリピン人など外国人女性が多くなり始めたパラオでは地元パラオ人女性の意識がそこに示されている。葬儀では一般にご飯をつくり多く手助けするのも女性で、女性グループも存在する。他方でパラオは系統的に日系人が存在しても、そのコミュニティが明確にあるわけではないとされる (今村：ロング, 2019)。逆に日系人社会という点で日本の集団主義がパラオに浸透しているわけではない。しかしボンペイにはない故人の謝金返済という独自の慣行がパラオにはある点で、家族や親族また近隣の互助ネットワークは強い。ここにはシマ社会の隣保共助が表れている。この点普段は個人主義だが、葬儀など何か起こると集団主義としての結束力を発揮するように思われる。

パラオ社会は外来社会との二重構造を形成してきた。この点は他の南洋群島とも共通するが、日本統治時代ではパラオ人と日本人だけであった。しかし現代はグローバ

ル社会を反映し多様な外国人が共生している、特に地理的にフィリピンに近いこともあり、フィリピン人女性の重要な雇用（出稼ぎ）先となっている。こうした外国人の居住が多くなるにつれ、その島民性への影響も小さくない。この点マルキョク州マルキョク村の70代女性によると、近隣とのコミュニケーションが問題で昔はテレビや携帯電話がなかったので隣近所の人とよく話をしたが、今はこうした機器があるためそれらを見たり利用するのに忙しく、かえってコミュニケーションがわずらわしく思う人が多くなった。また近隣関係の変化としてかつては親しい人が近くに多くいたが、今はバングラデシュ人やフィリピン人など外国人が住むようになりまったく知らない人が多く、自己紹介もしないし話をしない人がいる⁽²⁴⁾。さらに労働事情の変化として、マルキョク州にはフィリピン人がだいたい各家に一人いて家の掃除や洗濯をしている。家庭内の労働だけでなく、畑をもっているパラオ人も自分はしないでバングラデシュ人に畑作作業を任せるようになった。

日本人から見たパラオ人は戦前戦中を通じてステレオタイプ化されたイメージが伝えられていた。それは「パラオ土人は滑稽にして勇なり」という言葉に端的に示される（鈴木，1944）。日本人からは怠惰な島民と見られただろう。このため日本人の勤勉性に刺激されパラオ人はよく戦時中働いていたと言われるが、自分たちで労働することが少なくなった点を先のマルキョク村の70代女性は指摘している。日本は高齢者の介護で外国人の労働力を得ようとしているが、パラオでは若い夫婦も外国人を雇い家庭内外で外国人を使用している。この点同じパラオ人どうしの支え合いというよりも個人主義の傾向が強いと言えるだろう。しかしこの聞き取りをした女性は今でも自分で農業をし魚を獲っていると言う。今後集団主義から個人主義を強めることでパラオの島民性がどう変わるのか、互助慣行という点から注視していきたい。

②ポンペイの島民性

戦前のポナベ（ポンペイ）島民は南洋群島中最も勇猛な島民とされた（吉野，1915）。またポナベは当時ポネピとも表記され、この点は「ポネピの土人は剛直にして気概なり」と指摘されている（鈴木，1944）⁽²⁵⁾。戦前の文献では生活しか触れられていないが、その社会構造の根底には独特の階級（最高首長制）社会があり、それがまた強力な互助慣行と結びついていたように思われる。これがナンマルキ（酋長）を頂点とした位階制度である⁽²⁶⁾。

もう一つ別の階層がありイソナンヌケン（ナーニケン）を頂点とする⁽²⁷⁾。イソナンヌケンには副最高首長として一般の人が直接ナンマルキに接触できないため、その代わりに土地などの実務面で折衝する業務を担う。すなわちイソナンヌケンはナンマルキとのつなぎ役として一般の声をナンマルキに伝える。行政との関係では一般住民が村長に話をし、村長がイソナンヌケンに話をし、このイソナンヌケンがナンマルキに伝

える。こうしてナンマルキは住民の意見を聞くが、その意向はイソナンヌケンが動いて村長に伝える。キチ地区ポーク村の40代男性（村職員）の話では、ナンマルキと地区（行政村）長の関係について予算を組むときナンマルキとイソナンヌケンの活動資金が含まれる。これは両者の文化（活動）を尊重するためで、問題があると村長は行政だけで解決するが、ナンマルキとイソナンヌケンにも知らせるべきことは伝える。

このように各地区ごとに行政制度と首長（酋長）制度の二重構造が今も存続し、同族の結束は相互扶助において強いとされてきた⁽²⁸⁾。地域のつながりから死者が出るとお互い慰め、シュワスペネ（相互扶助）で弔事の世話をする。その逆に慶事ではカマデップ（kamadipw）で喜びを示す。空腹の人に食べ物やシャカオを勧めるなど支え合いがされてきた。それは日本のムラ社会のような濃密な社会関係はないものの、首長制度による結束力からゆるやかな集団主義を形成していると言えよう。この点ポンペイはパラオほど個人主義が強く浸透していないように思われる。

（2）互助慣行の移出入—日本語と生活様式の浸透

①「南洋の中の日本」（日本社会化）と戦後の近代化（アメリカ社会化）

<パラオ>

第一次世界大戦の敗戦国のドイツに代わり日本の委任統治領となるところからミクロネシア地域は日本の影響下に入る。1922年にパラオのコロール島に南洋庁が置かれ、かつてのスペインやドイツの「放任統治」とは異なる「直接統治」によってインフラ整備とともに日本語教育によって急速に「南洋の中の日本」がつくられた。バベルダオブ島では農業担い手の入植者が募集され、瑞穂村、清水村、朝日村、大和村などの開拓村が生まれた⁽²⁹⁾。当時の日本人の開拓に伴う困難は『南洋群島』などに記録が残されている（丸山，1942）⁽³⁰⁾。ガラスマオ州ウルスマウ村の50代女性によると、村落では日本の生活様式の影響はそれほど多いわけではないが、コロール州モッコの80代女性が言うように都市では日本からの影響が強かった。当時日本の習慣として玄関で靴を脱ぐ、また帽子をとる、あるいはお年寄りがそばを通ると頭をさげて会釈するなど日本の習慣がパラオに入ってきた。南洋庁の『南洋群島に於ける舊俗慣習』では、パラオ島民は悪習も多いが善良な習慣として年長者への尊敬や道の譲歩、上席への勧めなどが指摘されている（南洋廳，1939，91頁）。なお日本人がよくする花札はパラオで広まり、隣組も日本の統治によってつくられた。この「南洋の中の日本」の浸透度合いは島民の抵抗がそれほどないだけに朝鮮半島や台湾以上に強く早かった。

先に述べたムシンは日本の小口金融としてパラオに伝えられた⁽³¹⁾。マラカル島で50年以上も住む80代の日本人女性によると、パラオへの移住では東北や茨城、長野出身者が多かった。当時資源開発にとどまらず拓殖事業も手がけていた南洋興発設立者の松江春俊が福島県の会津出身ということもあり、入植者には福島県や山形県など東北出身者

が多くいた（北原尾入植40周年記念実行委員会，1987）。この日本人女性は広島出身で広島や山口では頼母子と言っていることも聞いた。このため日本では東日本に呼び名として定着している無尽の言葉がムシンとしてパラオで広まったことがわかる。その仕組みの多くは生活のために必要な資金を捻出する共済目的が中心である。

戦前戦中パラオでは教育が重視されたが、次代を担う子供たちの教育に力を入れたのはどの南洋群島でも共通する⁽³²⁾。こうした教育の重要性は日本の南洋群島への進出に伴い師弟の教育を本土と同程度のものにするため「日本人学校」が始めにつくられた（小島，1991）。その臣民教育がそのまま島民の「日本社会化」をもたらした⁽³³⁾。軍事上の拠点としての位置づけは当然としても（波多野，1991），同時に島民に対する「臣民化教育」が喫緊の課題であった。コロール州モッコの80代女性によると，学校の先生から「生徒の責任は何ですか」と質問され「責任感」について教えられ，日本の礼儀作法も身につけた。教室に入るときいつも言う次のような言葉があった。「私どもは立派な日本人です。天皇陛下の赤子です。私どもは忠義を尽くします」。ここには間違いなく「南洋の中の日本」があった。この点今の若者はアメリカの影響が大きく礼儀を知らないというよりも合わないと言う⁽³⁴⁾。このような戦後の「アメリカ社会化」はポンペイも同様であった。

<ポンペイ>

日本との関係では日本語がパラオ同様多く普及しているが，同時にそれは日本的な生活習慣の浸透でもあった。ポンペイのウ地区ナンマドールポウエ村ナンマダルの60代女性の話では，日本語の「サケ」という言葉はアルコールの意味で使われている。なおチューク（トラック）諸島から移住してきたソケース村ペイディの50代男性によれば，「ツッペリン」はドイツ語から入ってきた言葉で飛行機を意味する。コロニアに住む40代の男性は母親が日本人で，小さい頃家では日本語を話していた。「なつかしい」という言葉はポンペイ語にはない言葉だと言う。交換（kokan）は「交換しましょう」として今も使われている。この他パラオ同様ポンペイにも「ヤキバ」（焼場，火葬場）や「チバ」（唾，つば）など，日本語あるいは日本語から派生した言葉が多く残っている。

ウ地区ナンケピンアワク村の80代男性によれば，日本語教育を受け小学校（公学校）は5年間（本科3年補習科2年）であったが，3年生で学校に行かなくなった。ポンペイ人と日本人は別のクラスで，パラオと同じように天皇賛美の章句を唱えた。日本の現在の発展について質問を受けたが，ポンペイは戦後アメリカの中で生活が成り立っている。アメリカ人がもたらした缶詰が浸透しそれに慣れてしまった。食べ物を自分でつくらず，缶詰で手っ取り早く効率的に済ますようになった。また自給自足の生活からお金が流通して何でもお金で処理するようになった。アメリカの時代になり島民は怠け者になってしまった。さらに戦後礼儀を知らない者が多い。インターネットの普及で直接のコミュニケーションが少ない点も気になると言う⁽³⁵⁾。こうした指摘から日本人は手づ

くりの技術と礼儀作法を当時のポナペ人に教えたことがわかる。なおポンペイの人口の三分の一はグアムやハイアイ、アメリカ本土に出稼ぎに出ていると言われている。

このアメリカ化はキチ地区ポーク村の90代女性も指摘している。日本人から畑や米の作り方を学んだ。昔と今の違いは日本人がいたときはよく働いたが、いなくなると怠けるようになったことである。当時はみな手づくりだったが、今は機械で何でもする。畑も水田もなくなった。米の文化からアメリカの缶詰文化になった。ポンペイに20年以上在住する70代男性日本人の話では、確かに日本は南洋群島を支配したが、日本の貢献として大きかったのはインフラ整備で、また学校で勉強する習慣がなかった島に小学校をつくったことも評価されるべきである。しかしその一方で同地区エニペインパー村の60代女性によると、父親はコラスエ島（旧クサイ島）まで連れていかれ重労働させられ痛い目にあっている⁽³⁶⁾。ポンペイにも「南洋の中の日本」があり、「日本社会化」がもたらした功罪がいろいろ指摘されている。

既に述べたソケース島ナンモウセイ村の60代女性はムシンをしないがビンゴには参加する。この女性の出身地のピングラップ島でムシンをしなかったのは互助行為の各国（地域）間での相互の影響に注目する「互助慣行の移出入」という点で、日本人がいなかった、あるいは日本人との接触が少なかったことが影響しているだろう。当時のポナペでは荒れ地を開墾した日本人村として、戦前パリキールという現在のミクロネシア連邦の首都に北海道からの入植があり春來村がつくられた（能仲，1934，436-437頁）⁽³⁷⁾。南洋庁発行の『南洋群島要覧』によると、日本統治時代モノに対する執着心が薄く隣保相分け合う慣行は社会組織がそう複雑ではなく生活に余裕があるためとする指摘もあるが（南洋庁，1939）、日本人との接触によりしだいに生活の近代化が進む。既述したムシンなど戦前戦中の街中から戦後は村落にまで普及するなど、外来の社会と文化を受容することで新たな互助社会がつくられてきたと言ってもよいだろう。

②日本人と島民の交流

<パラオ>

パラオで生まれ育ち戦後本土に戻った日本人を懐かしむパラオ人がある。コロール州モッコに住む80代女性もその一人で、戦前戦中ガクラオという村にいて親しくしていた杉野さんに会いたいと思っていたが既に日本で亡くなっていた。パラオにいた日本人が帰国後入植した地域が宮城県蔵王町だった。パラオへの移住住民が1946年日本へ引き揚げ3月第一陣38人が到着5月に第二陣が入植し、笹小屋6棟を建て29戸が定着した（北原尾入植40周年記念実行委員会，1987）。合計引き揚げ者35世帯が遠刈田温泉街の中心地から離れた所で酪農生活を送り、かつてのパラオを懐かしみ忘れないために入植地を「北原尾（キタハラオ）」と命名した⁽³⁸⁾。この命名はパラオ在住日本人の帰還業務に尽力した元南洋庁拓殖部長で宮城県白石市出身の高橋進太郎（参議員議員，宮城県知事歴

任)の提案によるとされている(同上)。

コロール州モッコ村の80代女性によると、パラオのテレビ局が北原尾地区を取材している。戦時中7人の日本人の子供がパラオ人に預けられた。当時は子供を連れて日本に戻ることが難しかったため、今マルキョクにその日本人が一人いる。日本の政府はこの子供たちのことを考えてほしいと言う。これは言外に中国残留孤児だけではないことを訴えているようにも思われた。日本に兄弟がいてパラオに残された人が日本に行ったが、「日本ではお金がかかりパラオがいい」と言っている。このように中国の満州開拓と同様南洋群島の開発が行われ同時に日本人の入植がされた。しかしパラオ人と日本人との関わりは統治という点で二重社会がつくられていた。それでも街中ではそれなりの交流があり、そのよい思い出を抱いているパラオ人もいる⁽³⁹⁾。それは戦争という厳しい状況をお互いに支え合った仲間意識だったと言えよう。

<ポンペイ>

ポンペイ人は人なつっこいが一歩奥に入るとやはり外国人の壁を感じるというポンペイに20年以上在住する70代日本人男性の声は日本語を通して日本の生活習慣を受け容れつつも、ポンペイ独自の社会が維持されてきた点が読み取れる。それは日本人に対する屈折した感情の表われでもあった。ウ地区ナンマドールポウエ村ナンマダルの60代女性の話では、自分の父親が日本の女性とつきあっていただけ軍人にたたかれて病院で治療を受けたことがあった⁽⁴⁰⁾。片言の日本語を話す同地区ナンケピンアワク村ナナワクの80代男性は「隣組」を隣家が助けるという意味で知っていた⁽⁴¹⁾。当時国際結婚による交流も少なくなかった。キチ地区ポーク村の90代女性もポンペイの女性で日本人と結婚した人を何人か知っていた。マトレニーム地区ワパール村の50代女性によれば、自分の母親の父が日本人でクマタケンシと言った(ジはポンペイではシと発音する)。この男性の妹がポナベにいて母親の名前をつけた。日本に帰るとき船が決められ祖父は帰国した。この女性は自分のルーツをたどることで日本とのつながりを感じている。

先の70代日本人男性の話では、日本がポンペイを統治していたとき日本人と結婚して生まれた子供が戦後アメリカによる強制送還によって帰国した日本人の父親を探す人が何人もいた。このため頼まれて日本にいる親探しをしばらくしたことがあったと言う。GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)が一部の子供の願いを受け容れて、日本には自分の居場所がないことを訴え続けていた日本人父親がポンペイに戻ることを認めたことがあった。しかし日本では親の財産目当てではないかという疑心もあり、また過去にふれられたくない気持ちから、ようやく居場所を見つけても自分の子供に会いたくない親がいた。さらに戦後手紙のやりとりをして連絡があったものの、電話口の奥から「余計なことには関わらな」という父親の声が聞こえ探すのを断念したことも聞いた。このルーツ探しがもう一つの隠れた日本人と島民との交流であった⁽⁴²⁾。

5. 結語

パラオとポンペイの互助慣行は日本同様近代化の過程で衰退しつつあるが、まだ伝統的な互助行為によるつながりや絆が見られる。特にパラオでは葬儀に際して故人の借金を親族のみならず地域住民が負担するという慣行 (omengkad el blals) があり互助ネットワークが機能している。パラオの農村では日本のユイにあたる直接の言葉は見当たらないが、近い言葉に mengerakl がある。土地が他者の労働力を必要とするほど広くなく家内労働で処理できるため互酬性はないが、この言葉は草刈りなどの共同作業で使われ、順番に集団単位で労働力を回していく日本のユイ組の作業に近似する。現在は外国人労働者に賃金を払うことが多い。ポンペイではクミアイ (組合) という言葉で共同作業を行う。金銭的支援として金融互助のムシンがパラオとポンペイ両地域で普及しているが、これは日本人が伝えた無尽で利息を求めない相互扶助的な性格が強い。この点は利息志向の強い無尽とは異なる。婚葬儀ではパラオは omadek で弔慰金を出し、ポンペイは sawas という言葉で喜怒哀楽をともにする。

パラオでは klaingeseu, ポンペイでは sawaspene という相互扶助の言葉があり、モノを分け合う行為を前者で omekang 後者で kiskakis と言い、地域住民の一体感が維持されている。その一方で調査した農村では共有地がほとんど見られず共有意識は希薄である。困窮者への救済では公助や自助への要請が強くこれは急速に進む近代化の証左とも言える。パラオでは海岸の清掃で一部キンロウホウシ (勤労奉仕)、またポンペイでは共同作業で既述したクミアイ (組合) という言葉が使われ、日本的な互助慣行が浸透している。これらは戦時下の強制労働の残滓とは言え、目上の人に対する礼儀や責任感の付与など日本の慣行が土着のそれに加わり二重構造を形成してきたと言えるが、戦後日本の強要はなくなり新たな近代化 (アメリカ社会化) を迎えても、逆に「南洋の中の日本」 (日本社会化) が固有の互助ネットワークに同化融合することで新たな互助社会が生まれ持続しているように思われる。今回の知見を踏まえこれまで調査した東アジアや東南アジアと比較し、さらに他の南洋群島に通底するあるいは異なる互助慣行の解明が今後の課題である。

* 本論文は2015年度から2019年度の科学研究費助成事業の学術研究助成基金助成金による「日本と東南アジアの互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」(課題番号15K03860, 基盤研究 (C)) の関連調査の一部である (研究代表者<個人研究> 恩田守雄)。

<注>

(1) この二つの地域を選定した理由はパラオにはかつて日本が統治した南洋庁の本庁および支庁、またボンベイ（当時はポナベ）には支庁が置かれ、日本人の集落（町）が形成されていた点に注目したからである。なおパラオではパラオコミュニティカレッジ経営学科在籍のニライウエト・エシロング・バンダム君（23歳）、ボンベイでは日本への留学経験があるバレンティン・ロベスさん（41歳）に現地に通訳をしてもらった。またNPO法人パシフィカ・ルネサンスで現地住民による伝統文化の復興再生活動を行っている長岡拓也氏からは現地の言葉について教示を受けた。

(2) 南洋群島はマイクロネシア、メラネシア、ポリネシアの「裏南洋」とボルネオやジャワ、スマトラなどオランダ領東インドの「表南洋」を含む（吉野，1915）。この「表」と「裏」に対して「外南洋」，「内南洋」という言い方もされるが、これは南洋庁が置かれた1922年以降の呼称と言えよう。「内南洋」は西からパラオ諸島、ヤップ島、トラック（チューク）諸島、ポナベ（ボンベイ）島、クサイ（コスラエ）島から成るカロリン諸島、さらに東のマーシャル諸島、サイパン島などの北マリアナ諸島の各諸島郡から構成される。このうちグアム島を含むマリアナ諸島を南北に、カロリン諸島とマーシャル諸島が東西に位置し、Tの字を逆にした逆T字形の地域が日本の重要な南方資源を構成した。日本の南進論については志賀重昂を嚆矢とする（大畑，1991）。それは明治以降の文学作品や記録文学に表れている（神谷，1991）。特に南洋の豊富な資源への関心を惹起している点が注目される。

南洋庁発行の『南洋群島要覧』によると、特に本庁と支庁が置かれたパラオが地政上、ポナベ（ボンベイ）は南洋興発株式会社によるタピオカ（キャッサバ）によるデンプン事業など殖産上重要な島とされた（南洋庁，1939）。日本の軍事面ではなく経済面の進出はパラオ、ボンベイを始めとする「内南洋」とニューギニアやチモールなどの「外南洋」の製糖、水産、石油などの開発を進めた南洋興発の活動に代表される（南洋興発株式会社，1940）。それは「一、皇室を敬い国体を重んずべし 一、松江社長の開拓精神を永遠に伝ふべし 一、純忠至誠の大和魂を以て南洋産業の興隆に力むべし 一、家族主義を基調として同心協力すべし 一、質実剛健堅忍不拔以て勤勞すべし」という「南興精神綱領」に基づく（同上）。この中に出てくる松江社長は南洋興発設立者の松江春俊である。

(3) パラオ共和国はアイメリーク州 (Aimeliik)、アイライ州 (Airai)、アンガウル州 (Angaur)、ハトホベイ州 (Hatohobei)、カヤンゲル州 (Kayangel)、コロール州 (Koror)、マルキョク州 (Melekeok)、ガラルド州 (Ngaraard)、アルコロン州 (Ngarchelong)、ガラスマオ州 (Ngardmau)、ガスパン州 (Ngatpang)、エサル州 (Ngchesar)、アルモノグイ州 (Ngeremlengui)、オギワル州 (Ngiwal)、ペリリユー州 (Peleliu)、ソンソロール州 (Sonsorol) の各州から構成される。このうちガラスマオ州はウルスマウ、ゲツボング、ゲルトイの三つの村 (hamlet) から構成されている。人口はウルスマウで約60人12世帯、ゲツボングで約100人20世帯、ゲルトイは約90人である。ウルスマウの代表者は一番大きい一族の代表で選挙で選ばれることはない。農業の中心は主食のタロイモ（8ヶ月に1回収穫）で農地面積は50平方メートルある。この女性は家の近くに畑はあるが、政府が与えた離れた土地を利用している。ジャイアンタロ（普通のタロイモよりも大きい）、野菜（イサオルなど）、フルーツ（アボガド、パイナップル）をつくっている。米はアメリカ、日本、タイから輸入している。なおパラオは観光産業の比重が大きく、国連の世界遺産に指定さ

れているロックアイランドでは訪問客は入場税として50ドル払う。ディナークルーズのような湾内の航行だけでも同様に支払う。地元の人はその必要はないがロックアイランドに行く人はあまりいない。

- (4) この女性は昭和6（1931）年生まれで日本語が話せる。終戦の時は13歳で戦中の日本事情について聞き取りをしたところ、公学校3年補習科2年の教育を受けたが、補習科のとき戦争が激しくなり家で待機するようになった。このため実家のマルキョク村に戻った。そこでは若い人はパイン工場で働いていたが、女性の家はヤシの実の商売をしていた。
- (5) エシャング村は人口300人くらいで、この男性はソンソロール（Sonsorol）島出身で地区の代表者である。祖先はドイツ統治時代にコロールに移ってきた。ソンソロール諸島はファンナ（Fanna）、プロアナ（Pulo Anna）、メリール（Meriir）、ソンソロール（Sonsorol）の各島から成る。以下の内容はソンソロール島の互助慣行がそのままコロールに移住しても続けられていることを示す。この男性が住むエシャング村ではソンソロール島出身者が住み、4つの出身島ごとに代表者（chief）が一人いる。パラオは女性が代表者（首長、酋長）を選ぶが、ソンソロール諸島では男性の家系が代表者を継承する。各島出身者の人口はファンナ島2人、プロアナ島4人、メリール島1人、ソンソロール島20人から30人である。
- (6) マルキョク村の人口は約50人から60人で世帯数は10から11戸くらいである。この女性は高校はグアムでグアム大学に2年間通っていた。現在は仕事をやめて主にタロイモ、タビオカ、バナナ、パパイヤ、アボガドなどの畑作に従事している。
- (7) この種の建物は南洋群島全体に見られるが、特にパラオではその建築様式の模様が繊細に描かれている。アバイ（バイ）には首長（酋長）用もあるが、主として男性用（オール・メン・ハウス）とされ、ヤップ島では女性用に別のハウスがある（南洋庁、1939）。
- (8) 日本統治時代にバベルダオブ島とコロール島を結ぶ地域はかつて連絡船が就航し船着場があったことからRenrak（Rengrak）という地名が、灯台の場合はTodaiと呼ばれている。さらに人名では姓名の希薄な意識からYamadaやSudouなどに加えHaruoやIchiroなども姓として使われている。パラオ人名の2割弱に日本名があるとされる。この他mottainai（もったいない）やotsuri（おつり）などの言葉も散見され、パラオには日本語が多く浸透している（今井・ロング、2019）。「こじき」という言葉も日本から入ってきた。なおアンガウル州（島）の憲法ではパラオ語、英語と並び日本語が公用語とされている（同上、99-111頁）。それほど日本語が現地に定着し抵抗感なく受け容れられていることがわかる。
- (9) なおサイパンのサンロケ村（San Roque、人口約5,000人）の50代男性によると、サイパンでもムシン（musin）と言う。会社の人など50人で月2回集まり、一人20ドル出す。最初にくじで受け取る順番をすべて決める。この50代の男性はムシンが日本語の無尽（ムジン）からきていることは知っていた。経済的な目的もあるが、フィリピン人など多国籍の人と親しくなる社会的つきあいや仕事からする。
- (10) 農村では将来に向けて「特に問題はない」とこの男性は言うが、若い夫婦二人で働くとお年寄りが残され、シビックセンターなど高齢者の受け入れ施設で食事をつくることになる。まだ日本ほど深刻な高齢社会の問題はパラオにはないが、高齢化が進行しつつある。
- (11) ポンペイ島はミクロネシア連邦のポンペイ州に属し、Kolonia（コロニア）、Nett（ネッチ）、U（ウ）、Madolenihmw（マトレニーム）、Kitti（キチ）、Sokehs（ソケース）の各地

区 (municipality) から構成されている。これらはかつての首長国でありこの各地区は行政村、その下の単位が自然村、さらにそれよりも小さい単位の地名は集落として捉えることができるだろう。パリポウエ村 (自然村) の人口は約500人で、男性が住むボンパイル (集落) は23人3世帯である。ハタや熱帯魚、リーフフィッシュなどの漁業とパン (麵麩) の実を育てている。パンノキ (無核種 breadfruit tree, 有核種 bread-nut tree) の実は「パンの実」または「ブレッドフルーツ」と呼ばれ、ココナッツと同じくらいの大きさを蒸し焼きや丸焼きまた薄切りにして焼いて、あるいは天ぷらにして食べる。米はアメリカやオーストラリア、日本から輸入する。年1回品評会 (地元の言葉でエンピョウカイ) があり、農作物の一番いいものを表彰し報償として金品が授与される。このパリポウエは生活水準が低いものの、水は山から豊富にあるためそれほど不便を感じていない。なお村長は4年の任期で18歳から選挙権が得られる。

- (12) ポンベイの代表的な飲み物がシャカオでアルコールが含まれないが覚醒作用があり、行祭事ではよく飲まれる。
- (13) ナンマダル集落の人口は7人で、この女性は母親と親戚の3人でパンの実を植え貝や魚の採取で生活している。ここでは水の問題が大きく、女性は山からの水をタンクで利用しているが、困っている人がいれば水を提供する。
- (14) チョモン村の人口は約300人で40から50世帯ほどある。作物はパンの実、ヤシの実、バナナで米は買う。この男性の仕事はナンマルキ (最高首長、酋長) に代わりナンマドール (ナンマトル) 遺跡の入場料の徴収係である。ポナベは「石の祭壇の上に」の意味をもつが、この遺跡は海中の石城として浦島太郎の竜宮城とも言われ、ナンマトルは水路で隔てられているため「間隔の間」また「家がたくさんあるところ」の意味をもつ。一千年から建設が始まり13世紀から16世紀に最盛期を迎え、王や祭司者の住居、墓所、儀式的場、工房などができた。その詳細は考古学上の謎とされている。
- (15) ワパール村の人口は約300人で、作物はバナナ、ヤムイモ、シャカオでパンの実を植えている。地区の大きな問題は皆で分け合って使うため水の容量が足りないことで、飲み水はあるが下水や動物用が不足している。この他道路もよくない。
- (16) エニペインパー村の人口は約600人で、生業は魚、カニ、シャカオ、バナナ、ヤシの実である。水の問題が大きく山からの水がこないことがある。このほか道路に柵がないため子供が危ない。また高校生が校舎に入りお酒を飲むことも最近問題になっている。
- (17) ポーク村の人口は約20人で、生業は魚、ヤムイモ、バナナである。90代女性の孫 (女性28歳) が同席し聞き取りが難しい点を助けてくれた。この老女の話では、自分の夫は日本語をよく話し、「こんにちは、おはよう、さようなら」の日本語を教えてくれた。筆者が日本の「トントントンカラリトナリグミ,,」という隣組の歌を唄うと、何かを思い出したようにうなずいた。高齢にもかかわらず耳がよく聞こえ、今も草刈りをしている。この老婦は小学校4年終了後5年生のとき戦争が始まり、昭和20 (1945) 年当時はコロンビアにいて日本人の床屋で働いていた。その後18歳で結婚し8人の子供がいる。
- (18) ペイディ村の人口は約200人以上いる。1912年トラック (チューク) 諸島の小さな島 (Mortlock) から台風の被害が大きいため50代男性の母親がボンベイに来た。自分は一時戻り26歳のとき再びこの島に来て日本大使館の警備員もした。男性のふるさとの島には森さんや鈴木さんという日本人がいた。自分の兄も森さんと結婚している。このボンベイ

に來た当時は道が狭く、石の上を歩くなど不便なところだった。ここはナンマルキ（酋長）が所有していた土地で、人が亡くなるとナンマルキの許可がないと埋められなかった。なお自分たちでいるときはチューク語で話し、ボンベイ人とはボンベイ語で話す。この問題はボンベイ本島には川があるが、このソケイ島は水が少ないことである。

- (19) ナンモウセイ村の人口は約200人である。聞き取りには10代の女性（18歳）と男性（17歳）も加わった。この男子高校生の話ではソケース島は1912年にピングラップ（Pingelap）島（ボンベイ州）から來た人が住む島で、ドイツ軍の将軍を殺したためボンベイの人がパラオに連れてこられ、そこでピングラップ島の人がボンベイに來た。またピングラップ島で台風の被害がありボンベイに來た人もいる。年配の人はピングラップ語を話すが若い人はボンベイ語を話す。ここではリーフフィッシュなどを獲る漁業を中心に、ヤムイモ、タロイモ、バナナ、ヤシの実を育てている。
- (20) パリポウエ村ボンパイルの土地にはかつて日本の軍人の家が多くあった。この男性の奥さん（60代）から昔女性は土地を持てなかったが、日本では女性も土地を所有できたので土地がもてるようになったことを聞いた。日本が支配していた当時、土地は日本人のものだったが、日本人がいなくなると女性も土地を所有できた点はよかったと、日本統治のよいところを指摘している。
- (21) キチ地区の人口は約15,000人の5,000世帯で、産業は大工、教師、公務員、農業、漁業である。現在の地区長（57歳）は2期目（1期4年）で、当日は「女性の日」（Women's day）で出かけていなかった。25歳以上のキチ地区の村民が被選挙人で、島には村長会議がある。村会議員は各村に2人いる。一人は任期4年の選挙で選ばれ、もう一人は村長が指名する。村では道路整備（アクセス）が不十分で、家の近くに道路がなく不便である。また山の水を引いているため浄化した水がこない点も問題である。なおKitti Constitution Day（Kitti 村生誕日、2月27日）があり、小学校に皆集まり大運動会が行われる。
- (22) なおサイパンのサンロケ村で地元住民の葬式にたまたま出会い、多くの参列者とともに昼食（鶏肉、赤飯、ケーキ）をいただく機会があった。脳の病気で亡くなった42歳の男性は土葬された。
- (23) この村はナンマルキとイソナンヌケンが兄弟として一致協力する度合いが他の地区よりも強く、タイトル（称号）も上の人が住むため葬儀で持ち寄る品物も地位にふさわしく豪華である。
- (24) このためパラオ人は電話で話す相手が初めてでわからないと、共通の言語としてまず英語で話をして、相手がパラオ人とわかるとパラオ語で話すことが多い。
- (25) コロニアに住む40代男性によると、ボンベイ人はチューク（トラック）諸島は治安が悪いので行かない。「台風はボンベイで発生し、トラックであれば（台風の目ができる）、グアムでさらに大きくなり、日本に大きな被害をもたらす」という地元の言葉は台風をめぐる言い回しではあるが、チューク（トラック）諸島の荒々しさが示されている。このことは逆にボンベイ人の穏やかさの一面を示している。
- (26) ボンベイの位階制度（tribeとsubtribe<section>のタイトル<称号>についての仕組み）の先行研究として、リーゼンバークが1947年7月から48年1月まで行った調査とその他の文献研究を基に文化人類学的知見からまとめたThe Native Polity of Ponape（Risenberg, 1968）があるが、本稿の記述は筆者の聞き取り調査に基づいている。それは学術的な精度

には欠けるが、また首長（酋長）制度そのものを研究対象にするものではないためその内容を十分精査する余力はないものの、地元住民の発言からも位階制度に対する考え方を知ることができるだろう。従って本稿は互助慣行に関わる内容を中心にした首長（酋長）制度の記述にとどまる。コロニアに住む40代の男性によれば、ナーンマルキの制度をつくったのは土地や生活習慣を守るため、独裁者（サウテロール）の時代に3つ（イソカルケル、ルーク、ナーンマルキ）に分立し、ナーンマルキ（Nahnmwarki）が各タイトルをつくったとされる。結婚は同じ位階の人とするとは限らない。この点はインドのカースト制度とは異なる。女性にもタイトルがあり、ナーンマルキの奥さんはナーナレキ（Nahnalek）である。この男性はタイトルがアロンで、奥さんはリヨルである。13歳から14歳になるとタイトルをもらうが、父親が亡くなると息子はそのタイトルをナーンマルキの承認を得て譲り受ける。なお戦前の島民生活は森下の文献に詳しい（森下、1944）。

- (27) 各地区（municipality）にナーンマルキとイソナンヌケン（ナーニケン）がいる。その名称は上位12くらいまでは5つの地区共通だが、呼び名は地区で異なるものもある。リーゼンパークはこの二つの系統（Nahnmwarki, Nahnken）を各地区ごとの聞き取りと過去の参考文献を基に情報源別の一覧表を作成している（Risenberg, 1968, pp8-20）。その表は便宜上Nahnmwarki系列のA-lineとNahnkenのB-lineに分けている。ナーニケンとは本稿では現地人がイソナンヌケンと言うのでこの表記にしている。筆者が聞き取りをしたネッチ地区パリボウエ村の70代男性はソウルコ（souruk）に位置付けられる人であったが、これらのタイトル（称号）はナーンマルキがつける。リーゼンパークの位階の一覧表によれば、これはイソナンヌケン系列のソウルコ（soulik）の位階を示すものと思われ、意味はmaster（主人）である。

なおナーンマルキ、イソナンヌケンの他にマルコノチ（mwar koanoat）の制度もあるが、これは名誉（koanoat）の称号（mwar）で上下の位階はないとされる。さらにリーゼンパークはsectionとして土地の地名（地域）ごとに示したタイトルを指摘し、これも二つの系統（便宜上x-lineとy-lineで表記）があるとす（*ibid.*, pp.21-33）。すわなちポンベイ人は部族（tribe）のタイトル（二系統）と地区（section）のタイトル（二系統）をもっていることになる。後者の土地（地域）に基づくタイトルは日本の村落で家の地位や所在地、特徴などからつけられた屋号に近似するものと考えられる。いずれにしても最高首長のナーンマルキから授与される称号と集落の首長から授与される称号がある（河野、2011）。コロニアに住む40代男性の話では、動物にも位階があり犬が一番上で豚がその次とされる。葬儀や婚儀で犬を持ってくるとそれは名誉な行為とされる。

- (28) コロニアに住む40代男性によれば、ポンベイもパラオ同様母系制社会で母親が神様（サメやエイの神）なので母方の子供（女子）がその神様を受け継ぐ。このためナーンマルキやイソナンヌケンになれるかも定められている。なお島の川にはウナギが生息しているが、海がきれいなのはウナギがいるためで神聖なものとされ地元の人は食べない。マーシャル諸島にはポンベイのような位階制度の仕組みはないが、ソケース地区ベイディ村の50代男性によれば、チューク（トラック）諸島にも位階制度があり、ナーンマルキに相当するマッカ（makkan）がいる。世襲だけでなく選挙で選ばれることもある。
- (29) 日本人の南洋への進出は16世紀中頃のオランダのアジア進出に伴い海外貿易のみならず海外移民も伴った。その移民は日本人の集落である日本人町以外に南洋各地の島嶼地域で、

日本人移民が労力と兵力の不足を補完するためオランダの移民政策に組み込まれていたとされる(岩生, 2014)。天草や長崎出身者が多くバタビア(ジャカルタ)で働く兵士や水夫、職人などに勤勉な日本人が低賃金で徴用されたが、その後任務を解かれ解雇された日本人が鎖国政策の導入により日本への帰国が絶たれたとき定住への道を歩み始めた。こうして日本人町の形成が本格化する。

- (30) 昭和5(1930)年に入植した朝日村はガルミスカン植民地として知られ、当時の過酷な生活は残された記録から知ることができる(丸山, 1942)。
- (31) 地元コロールの30代男性によると、ムシンは18人です。無尽をmushinと発音するが、これはパラオ語ではタイヤのチューブ(muži)の意味をもつ。
- (32) パラオは現在小学校8年、高校4年の合計12年制で、島には公立高校が1校ありその他は私立である。
- (33) 作家中島敦は南洋庁の内務部地方課の国語編集書記として地元の初等教育(公学校)の教科書編纂がその任務であった。中島は『環礁—ミクロネシア巡島記抄—』(1942)などで当時の記録を残し、またそれらを素材とした小説を書いている(寺尾, 2017)。
- (34) こうした日本人による礼儀作法の教育を評価しつつも、コロール州モッコの80代女性の話では日本人に対するもう一つの意識として、ライ病の人やお坊さん、飛行機からパラシュートで落ちた米軍兵を殺すなど、軍隊のトップでよくない人がいたことも指摘している(寺尾, 2017)。こうした歴史の暗部があるとは言え、両国の交流は今なお続いている。
- (35) この80代男性に日本の少子高齢化について話すと、ここでは女性が子供を3人から4人、多くて7人くらい生むことを聞いた。なお通訳をしてもらった男性の奥さん(ポンペイ人)の母親は兄弟が12人いる。
- (36) ポンペイに在住する70代日本人によると、ポンペイ人が義勇兵として日本の軍服と武器を持たされパプアニューギニアに送られた者がいた。通訳の父親もその体験者で無地に島に戻ってきたことを聞いた。
- (37) この村名の春来村は「パリキール」を「春来る」と読むことから命名されたものと思われる。
- (38) 筆者は限られた時間ではあったが、パラオで生まれ終戦当時4歳だった宮城県刈田郡蔵王町の北原尾農事組合の組合長から、日本での入植当時蔵王おろしの中で厳しい開拓生活を送った話を聞くことができた(2019年4月聞き取り)。その記録が『北原尾のあゆみ』として残っている(北原尾入植40周年記念実行委員会, 1987)。なお戦後70年を機会に2015年4月天皇后両陛下(現上皇上皇后)がパラオ島と激戦地のペリリュー島を訪れている。筆者が行ったペリリュー島の南端には「西太平洋戦没者の碑」がある。なおこの北原尾地区の入り口には同年6月の訪問を記念した「天皇后両陛下下行幸啓記念碑」がある。このパラオからの帰還者が入植した地域がもう一つあり、それが宮崎県小林市南西方の環野地区なまきのだった(寺尾, 2017)。
- (39) 小学校は日本人対象の国民学校、パラオ人対象の公学校に分かれていた。国際結婚は別にして、当時日本人とパラオ人との接触は少なかったことが知られている。その交流は南洋庁の役人との関係ではパラオから日本への内地観光団やパラオ熱帯生物研究所の研究員、パラオ放送局のマスコミ関係者などがいたコロール島に限られ、日本人が入植したバベルダオブ島ではない(寺尾, 2017)。

- (40) この女性からトラック（チューク）諸島が最も戦争の被害が大きく、ここポンペイではそれほどでもなかったことを聞いた。当時トラック諸島には日本海軍の一大拠点があった。日本との関係について筆者が隣組の歌を唄うと、それは戦後父親が酒を飲み酔っ払うときの歌だと言った。
- (41) 当時島には2万人の日本軍が駐留し戦争の準備をしていた。グアムやサイパンは船が入りやすかったが、ポンペイは珊瑚礁で船が入りづらい。すぐに終戦の情報が入った。つらい思いは日本人にムチでたたかれたこと、自分は盗んではないのに自分がしたと言うまでたたかれたこと、当時ポンペイ人は日本の女性と結婚できないのにしたときは問題になったことなどをこの80代の男性から聞いた。
- (42) 中国の満州開拓団とは異なるが、ポンペイでの戦前戦中の国際結婚による残留孤児がいることは国際交流、ひいては日本的な生活様式の浸透を象徴する出来事と言えるだろう。

<参考文献>

- 波多野澄雄, 1991「国防構想と南進論」『東南アジアと日本』（講座東南アジア学10）矢野暢編, 弘文堂, 147-165頁。
- 今村圭介, ダニエル・ロング, 2019『パラオにおける日本語の諸相』ひつじ書房。
- 岩生成一, 2014『続南洋日本人町の研究—南洋島嶼地域分散日本人移民の生活と活動—』岩波書店。
- 神谷忠孝, 1991『「南洋」神話の形成』『東南アジアと日本』（講座東南アジア学10）矢野暢編, 弘文堂, 49-63頁。
- 河野正治, 2011「首長への不満と再分配の魅力—現代ポーンペイにおける最高首長の権威の相対化—」『日本オセアニア学会NEWSLETTER』No.101, 11-21頁。
- 北原尾入植40周年記念実行委員会, 1987『北原尾のあゆみ』。
- 小島勝, 1991「南洋の日本人学校と『臣民』教育』『東南アジアと日本』（講座東南アジア学10）矢野暢編, 弘文堂, 129-146頁。
- 丸山義二, 1942『南洋群島』大都書房。
- 森下正明, 1944「島民』『ボナベ島—生態学的研究—』今西錦司編, 彰考書院, 123-314頁。
- 南洋廳編, 1939『南洋群島に於ける舊俗慣習』南洋廳。
- 南洋庁編, 1939『南洋群島要覧』（昭和14年版）南洋庁。
- 南洋興発株式会社, 1940『伸びゆく南興—南洋開拓と南洋興発株式会社の現況』南洋興発株式会社。
- 能仲丈夫, 1934『赤道を背にして』中央情報社（1990, 復刻版, 小菅輝雄編, 南洋群島協会）。
- 大畑篤四郎, 1991「南進論の系譜』『東南アジアと日本』（講座東南アジア学10）矢野暢編, 弘文堂, 33-48頁。
- 恩田守雄, 2006『互助社会論』世界思想社。
- Onda, Morio. 2013. 'Mutual help networks and social transformation in Japan,' *American Journal of Economics and Sociology*, 71 (3): 531-564.
- 恩田守雄, 2019『支え合いの社会システム—東アジアの互助慣行から考える』ミネルヴァ書房。
- Riesenberg, Saul H. 1968. *The Native polity of Ponape*. Washington: Smithsonian Institution

Press.

鈴木経勲, 1944 『南洋風物誌』 日本講演協会。

寺尾紗穂, 2017 『あのころのパラオをさがして—日本統治下の南洋を生きた人々』 集英社。

吉野作造, 1915 『南洋』 (徳富猪一郎監修) 民友社。